

平成30年6月9日現在

機関番号：32604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12852

研究課題名(和文) 日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究 1940-1960年代を中心に

研究課題名(英文) A comprehensive study on memory and representation of 2nd Sino-Japanese war:
focused on the 1940-1960's

研究代表者

五味 典嗣 (Gomibuchi, Noritsugu)

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10433707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日中戦争・アジア太平洋戦争の同時代に中国での戦争を描いた日本語のテキストを取り上げ、当時の書き手たちが現代進行形の戦争をどう表現したか、幅広く検討した。また、戦後の文学や映画において、中国の戦場における日本軍の加害の記憶がどう表現されたかについて、精しい調査と分析を行った。上記の研究の成果は、単著『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』(共和国、2018年5月刊行)などの成果として公表した。今回の研究を通じて、20世紀の戦争をテーマとする国際的・学際的な共同研究への手応えを掴むとともに、文学研究の側から戦争とメディアの関係を問うことの意義を確認することができた。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated the manner in which the battlefields of China were depicted in documents written during the Second Sino-Japanese War / Asia-Pacific War, including a detailed analysis of language used by writers as events unfolded. Descriptions of war-time memories and experiences documented after Japan's defeat were also discussed. Particular attention was given to identifying how language was used to describe the Japanese army's invasion of China and its use of violence in China. This research project was realized through the collaboration of researchers from various fields from both within Japan and abroad. These findings highlight the current significance of research pertaining to war literature.

研究分野：日本文学

キーワード：日中戦争 戦争記憶 ナショナリズム 言論統制 プロパガンダ 検閲 占領期 東アジア

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでの科学研究費補助金等による研究活動を通じて、1930-1940年代の日本語文学について、一国的ではない文学(史)理解の可能性を開くべく、国内外の研究者と学際的な対話と交流を積み重ねてきた。本研究は、こうした成果と実績を踏まえ、対象を日本語で書かれた日中戦争関連テキストへと絞り込む一方で、視野を日本敗戦後にまで押し広げて、より通時的かつ総合的な日中戦争表象の分析と位置づけを目指したものである。

本研究に着手した背景として、敗戦後の日本社会における戦争記憶の偏りという問題が挙げられる。単に文学や映画だけではなく、学校教育から大衆文化のレベルに至るまで、日本社会が想起する「先の大戦」の記憶は、明らかに1941年12月8日以降のそれと結びつけられている。より明らかに侵略や加害の経験・記憶が問題になる1937年7月以降の中国戦線については、南京での一連の事件を除いては、個々の戦場や特定の場所と紐付けられた記憶が語られることはほとんどなかったのである。この事実、現在の東アジアにおける歴史と記憶をめぐる根深い対立の淵源の一つと見ることができる。

以上のような経緯と背景は、戦後日本における戦争記憶の語り、同時代の国際秩序の揺動を含めた歴史のコンテキストの中で位置づける必要を示唆している。そこで、本研究では、中国の戦場をめぐる日本語の体験や記憶の語り、戦争の同時代から日本帝国の解体と占領、冷戦体制と東アジアでの内戦の始まりと続いた文脈を意識しつつ、日本社会が「先の大戦」に関わる加害の記憶をどのように位置づけたか(位置づけなかったか)という観点から、文学や映画にあらわれた表象をもとに検討することを企てた。

誰もが知る通り、記憶とは、ひどく曖昧で不安定なものである。時間の経過による変形も避けられない。あくまで対話的な関係から引き出されるものだから、受け手側のコンテキストに依拠する部分も大きい。よって、戦争記憶を考えるうえでは、単に語られ、記録された内容面のみならず、語りの空白・動揺・沈黙にも留意する必要がある。

このテーマにかかる先行研究として、戦争体験者の社会的な退場が近づいていることが強く意識されるようになった1990年代以降、歴史学・社会学・メディア史研究の立場から、重要な成果が登場していた(野上元『戦争体験の社会学 「兵士」という文体』弘文堂、2006年。成田龍一『「戦争経験」の戦後史 語られた体験/証言/記憶』岩波書店、2010年)。だが、これらの業績は、「先の大戦」の記憶一般を問題化しており、どの戦場の記憶が、いつ・どのように構築され、いかなる文脈で再生産されてきたかという観点からの内在的な分析は十分とはいえない。そこで、本研究では、近現代文学研究の手法を

援用しながら、戦争記憶の語りと表象に刻まれた空白や文脈の切断、語りに潜在する抵抗の痕跡を浮上させることで、日本語の戦争記憶のアーカイブの偏りとイデオロギー的な問題性の双方を具体的に浮上させることを目指したのである。

2. 研究の目的

日本語による日中戦争の語りと表象に着目、戦争の同時代から1960年代までの体験・記憶の語りの構成・受容・再編のありようについて検討する。具体的には、以下の3点を目的とする。

(1) 日中戦争を描いた文学・映画作品について、戦争の同時代から1960年代までを区切りとし、網羅的な調査と資料の集積を行う。その際、作品が描く場所や時期、語りやプロットの特徴、頻出するイメージに着目、文学と映画が主題化した「描かれた日中戦争」の特徴を明らかにする。また、文学や映画がさまざまな声を刻み込んでしまうテキストとしてあることを踏まえ、戦場の他者たちの声の痕跡が、どのように表象されたか(表象されなかったか)を、分析を通じてあとづける。

(2) 地域社会における戦争体験の発掘・継承の営為において、どのような記憶の語りや蓄積されてきたかを調査する。その際、そうした体験や記憶の語りや文学・映画との相関や、語りの内容や形式の独自性、地域社会における戦争記憶の位置づけについて、聞き取り調査を含めた検討を行う。

(3) 日中戦争の戦争記憶を位置づける文脈の再審と再定義を図る。日中戦争・アジア太平洋戦争から日本敗戦、冷戦期にかけて日中関係は劇的に変化したが、そうした政治的なコンテキストと文学・映画・戦争体験の語りとの間にどのような関係が指摘できるのか。また、日本帝国の解体と冷戦の始まり、中国と朝鮮半島での内戦等の歴史的な契機が、日本語の戦争記憶の語りにもどんな影響をもたらしたかを明らかにする。

3. 研究の方法

主に以下の3つの方法に拠りつつ、研究を進めた。

(1) 対象テキストの網羅的な調査と分析。本研究課題の対象となる日中戦争に関わる戦争文学・従軍体験記・戦争映画の調査と関係資料の集積・分析を行った。また、中国大陸での激戦を経験した部隊の所在地を中心に、戦時・戦後における地域での戦争体験の語りについての調査を行い、地域ごとの戦争記憶の構成の諸相を検討した。

(2) 研究を位置づける理論的な枠組みの構築。冷戦期の国際秩序形成と日本語の戦争記憶の語りとの相関をより具体的にあとづけることを目的に、歴史認識や記憶論にかかる理論的な検討を行った。さらに、記憶/歴史の語りやしばしば人々の情動と結びつくことに着意して、ナショナリズムと身体、情動

性との関わりを問うた最新の研究成果を追尋した。

(3) 学際的・国際的な研究交流の推進。研究代表者が培ってきた研究上の人脈とネットワークを活用する他、関連学会・研究会等に積極的に参加することで、複数の言語圏を意識した領域横断的な視野を確保することを目指した。加えて、日本語の文脈における戦争記憶の語りを相対化することを目的に、諸外国の記念施設や博物館等にアプローチし、戦争記憶や共同体にとっての「負の記憶」の表象・表現に関する理解と認識を深めた。

4. 研究成果

本研究課題の具体的な成果として、以下の3点を挙げることができる。

(1) 日中戦争・アジア太平洋戦争の同時代に公開された従軍体験記・戦争小説・従軍報告等を一括して「戦記テキスト」と名付け、軍・政府の報道管制との関わり、語り方の特質、他者(中国軍・中国人)表象にかかる問題点等を明らかにした。1937年7月以降の中国での戦争は、日本軍隊に参加したさまざまな立場の軍人(将校・下士官・兵)や軍属によって言語化され、日本語の読者に受容されたが、それらのテキストは、軍や政府の戦争報道にかかる検閲のコードと、そうした規制とを「忖度」した出版者・編集者による制約を受けていた。すなわち、それらのテキストは、戦争を遂行する軍・政府の立場から「見せてもよい範囲」の戦争、「語ることが許される範囲」での軍隊組織の日常を積極的に描き出すことで、銃後の人々の戦争観や戦場認識を構築する役割を担ったのである。また、これらのテキストには、戦争・戦場の記憶を特定の型に嵌めることで、戦場からの帰還者たちが、自らの体験や記憶を語ることを抑圧する効果も期待されていた。

本研究では、戦争の同時代において、中国での戦争の現実が十分に伝えられなかった事実それ自体が、日本帝国がさらに戦争の規模を拡大していくうえで重要な与件となっていたことを明らかにした。なお、これらの分析のうち、対米英蘭開戦以前に中国の戦場を描いたテキストにかかる調査と検討の成果は、単著『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』(共和国、2018年)として刊行した。

(2) 日本敗戦後の占領期に、中国での戦争がどのように語られたか、主に新聞・雑誌の言説を対象として、資料の集積と整理を行った。厳格な報道管制と言論統制が行われていた日中戦争・アジア太平洋戦争の同時代には、日本内地の読者は、戦地での日本軍の暴虐行為や、のちに戦争犯罪と指弾された行為についてほとんど知らされることがなかった。逆に言えば、戦時下の日本軍隊による「負の記憶」、残虐な加害のありようは、日本敗戦後に初めて「国民」の前に告知知らされたことになる。本研究では、日本敗戦後に日中戦争

の経験と記憶を描いた文学テキストや映画の調査を行った他、極東国際軍事裁判(東京裁判)をめぐる報道の中で、中国における日本軍の加害行為がいつ、どんなタイミングで、誰によって、どのように語られたかについて、多角的な調査を行った。

その過程で、日中戦争期最大の筆禍事件として知られた石川達三『生きてゐる兵隊』の戦後版(河出書房、1945年)の刊行経緯と本文の形成過程に着目、『生きてゐる兵隊』が日本敗戦後に南京事件に関する記憶をいちはやく日本語の文脈に伝えたテキストだったことを確認するとともに、そのテキストへの反響とその論理を追尋することで、日本敗戦直後の言説の場で、日本軍による加害の語りがどのように受容されたか、詳細な検討を行った。

(3) 研究の問題意識をさらに発展・深化させることを意識して、以下の研究活動を行った。2015(平成27)年度は、本研究課題の現在の意義を確認することを目的に、2011年3月の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故の過酷事故以後の記憶が、東京のメディアと福島県浜通り地域とでそれぞれどのように語られているか(語られていないか)を考える移動ワークショップを開催した。そこでは、戦後日本における「先の大戦」に関わる語りと、3・11以後の「復興と再生」の物語とがともに自閉的なナショナリズムへの傾斜を含みこんでいることを批判的に検証することができた。2016(平成28)年度は、戦時・戦後を貫く中国表象のアイコンとして「李香蘭」のイメージに注目、「李香蘭」映画におけるジェンダー表象の文化政治について検討した。また、戦後における「李香蘭」映画の受容に関しても調査を進めた。これらの成果は、米国で行われたワークショップにおいて報告した。2017(平成29)年度には、戦後における日中戦争表象の一類型として「メロドラマ」的な物語に注目、関連するテキストや資料の集積・分析を行った。また、日中戦争・アジア太平洋戦争期の「大陸文学」「大陸映画」をこのジャンルの源流と位置づけ、異性愛を基本とする「メロドラマ」の構図と、戦時・戦後日本の人種主義的なイデオロギーとの相関やズレに注目する分析を行った。その成果の一部は、学内学会である大妻女子大学国文学会において発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

五味淵 典嗣、石川達三と東京裁判『生きてゐる兵隊』戦後版の受容をめぐる、大妻国文、査読無、49号、2018、91-113

五味淵 典嗣、言語とイメージのあいだ

日中戦争期における文学とプロパガンダ、大妻女子大学草稿・テキスト研究所年報、査読無、10号、2017、42-58

五味淵 典嗣、日中戦争期 大陸映画工作への一視点 大妻女子大学図書館所蔵『中支派遣軍報道部映画関係調査資料』を手がかりに、大妻国文、査読無、48号、2017、129-149

五味淵 典嗣、スペクタクルの残余 日中戦争期戦記テキストの戦場表象、論叢国語教育学、査読無、12号、2016、91-106 <http://doi.org/10.15027/43014>

五味淵 典嗣、なぜ 中国の戦線 を問うのか 日本における戦争記憶の現在形、人間生活文化研究、査読無、25号、2015、353-360

http://journal.otsuma.ac.jp/2015no25/2015_353.pdf

〔学会発表〕(計7件)

五味淵 典嗣、石川達三と東京裁判『生きてみる兵隊』戦後版の受容をめぐる、グローバルな記憶空間としての東アジア第1回国際セミナー、2017

五味淵 典嗣、メロドラマの(不)可能性 久米正雄『白蘭の歌』を手がかりに、第97回大妻女子大学国文学会例会、2017

五味淵 典嗣、金哲著・渡辺直紀訳『植民地の腹話術師たち 朝鮮の近代小説を読む』書評会のために、科学研究費補助研究「植民地朝鮮のプロレタリア文学・文化運動と日本の関係研究」、2017

五味淵 典嗣、言語とイメージのあいだ 日中戦争期における文学とプロパガンダ、大妻女子大学草稿・テキスト研究所2016年度シンポジウム「戦争・アジア・検閲 1940年代の文化と政治」、2016

五味淵 典嗣、表象としての「李香蘭」『白蘭の歌』をめぐる、ワークショップ「人間の移動と文化的記憶の政治」、2016

五味淵 典嗣、交錯する偶像 火野葦平から李香蘭へ、日本大学人文科学研究所総合研究「近代東アジアにおける記憶の表象：話者と視覚の運動」、2016

五味淵 典嗣、日中戦争期戦記テキストにおける朝鮮人表象 金史良『郷愁』の言語戦略、国際シンポジウム「植民地朝鮮の文学・文化と日本語の言語空間」、2015

〔図書〕(計1件)

五味淵 典嗣、共和国、プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち、2018、全448ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

五味淵 典嗣 (GOMIBUCHI NORITSUGU)

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：10433707

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()